



第30号

2023 (令和5) 年
3月31日発行発行所
京都市下京区堀川通花屋町下ル
仏教壮年会連盟広報委員会

題字：理事長 倉石 功

「朋友」とは、同信のなから。
2008 (平成20) 年4月の仏教
壮年会連盟発足にあたり、
仏社員が力を合わせ、とも
に歩みを進めていこうという
願いから名づけられました。

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)について の消息が發布されました

本年一月十六日の御正忌報恩講法要で満座に続いて、ご門主様は新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え) についての消息を發布され、み教えの肝要が広く、また次の世代に伝わることを願われて、新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え) を示されました。

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え) についての消息

本年三月には、「親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」という記念すべき勝縁をお迎えいたします。このたびの慶讃法要は、親鸞聖人の立教開宗のご恩に深く感謝し、同じお念仏の道を歩む者同士が、あらためて同信の喜びを分かち合うためのご法要です。また、これを機縁として、特に若い人やこれまで仏教や浄土真宗に親しみのなかった人など、一人でも多くの方々に浄土真宗とのご縁を結んでいただきたいと思います。

伝道教団を標榜する私たちにとつ

て、真実信心を正しく、わかりやすく伝えることが大切であることは申すまでもありませんが、そのためには時代状況や人々の意識に応じた伝道方法を工夫し、伝わるものにしていかなければなりません。このような願いをこめ、令和三年・二〇二一年の立教開宗記念法要において、親鸞聖人の生き方に学び、次の世代の方々にご法義がわかりやすく伝わるよう、その肝要を「浄土真宗のみ教え」として示し、ともに唱和していただきたい旨を申し述べました。

浄土真宗では蓮如上人の時代か

ら、自身のご法義の受けとめを表出するために『領解文』が用いられてきました。そこには「信心正因・称名報恩」などご法義の肝要が、当時の一般の人々にも理解できるよう簡潔に、また平易な言葉で記されており、領解出言の果たす役割は、今日でも決して小さくありません。

しかしながら、時代の推移とともに、『領解文』の理解における平易さという面が、徐々に希薄になってきたことも否めません。したがって、これから先、この『領解文』の精神を受け継ぎつつ、念仏者として領解すべきことを正しく、わかりやすい言葉で表現し、またこれを拝読、唱和することでご法義の肝要が正確に伝わるような、いわゆる現代版の「領解文」というべきものが必要になってきます。そこでこのたび、「浄土真宗のみ教え」に師徳への感謝の念を加え、ここに新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)として示します。

南無阿彌陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の
弥陀のよび声

私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ
「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ありがとう といたいて
この愚身をまかす このままで
救い取られる 自然の浄土
仏恩報謝の お念仏

これもひとえに
宗祖親鸞聖人と
法灯を伝承された 歴代宗主の
尊いお導きに よるものです

み教えを依りどころに生きる者 となり
少しづつ 執われの心を 離れます
生かされていることに 感謝して
むさぼり いかにに 流されず
穏やかな顔と 優しい言葉
喜びも 悲しみも 分かち合い
日々に 精一杯 つとめます

この新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)を僧俗を問わず多くの方々に、さまざまな機会で拝読、唱和いただき、み教えの肝要が広く、また次の世代に確実に伝わることを切に願っております。

令和五年 一月十六日
二〇二三年

龍谷門主 釋 專 如

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)を

拝読、唱和しましょう

ここ数年、私たちの生活は大きく

変わってしまいました。子どもから大人まで、新型コロナウイルス感染症拡大の大きな影響の中で過ごすことになりました。世界に眼を向けても、力による抑圧や争いは、人びとを傷つけ、苦しみが続きます。

歴史を振り返っても、私たちは、「いかり」「むさぼり」「おろかさ」に流され、同じことを繰り返しているのかもしれない。

1962(昭和37)年、親鸞聖人700回大遠忌を契機に門信徒会運動が展開され、現代まで、仏教壮年は「御同朋の社会」をめざして活動を重ねてきました。その中心は、「仏教壮年会連盟綱領」にもある通り、自らの生き方を親鸞聖人のみ教えに聞くことです。では、親鸞聖人のみ教えとは、自らの生き方とは、どの

ようなものでしょうか。

親鸞聖人のご生涯を恵信尼さまは、「生死出ずべき道をもとめて……」生き抜いた方、と表現されました。少し平易に表現すると「苦しみから離れる道」を求めて「仏さまになりたい」と願われた人生、といえます。ただし、厳しい修行では達成できない「煩惱を離れることができない」自分が、唯一「仏さまになれる」道が、阿弥陀仏の願いをそのまま受け取る、という法然聖人の教え、お念仏だといえられました。

どの時代であつても、そして現代もまた、苦しい、不安な時代を送らねばなりません。特に今の時代、若い世代では、多くの事柄を親や祖父母から、家庭で受け継ぐことが困難になった時代です。

500年の間、拝読された『領解

仏教壮年会連盟講師

高田 たかだ

篤敬 あつり



文』は、蓮如上人がお示しくされました。阿弥陀仏の願いは、私たちの不安(煩惱)を「めあて」とされ、名号となって私のもとまで至り届いてくださる「安心(あんじん)」、その願いに応え、そのままお任せする私たちの姿「報謝(ほうしゃ)」、また、その教えをはるか時を隔てた現代の私に届けてくださった方々へのおかげ様の心「師徳(しとく)」、そして、そのお念仏に生きる、つまりみ教えに生きる「法度(はつと)」として表現されます。

このたび、親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年のご法要をお迎えする本年の1月16日、ご門主様は新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)をお示しくされました。私たち仏教壮年が、み教えに生きる姿を、お念仏に生きる姿を示すことで、次

の世代に伝えていき、朋友の輪を広げ、心豊かに生きる社会を実現するため、この新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)を広く拝読、唱和しましょう。



九州地区門信徒の集い

第24回仏教壮年熊本大会 開催報告

熊本教区仏教壮年会連盟理事長

陣内 巧
じんない たくみ

去る2022(令和4)年10月30日、浄土真宗本願寺派九州地区門信徒の集い 第24回仏教壮年熊本大会が「つながり」とともに聞き まこと

のよろこびを伝えよう」のテーマのもと熊本城ホールで開催され、九州各所から約1200名が参加されました。新型コロナウイルス感染症の影響で、参加人数を会場収容人数の半分に絞るなど制限はありましたが、オンラインではなく、久しぶり



況、感染対策などの環境が整い、開催することができました。平成28年熊本地震より6年、令和2年7月

の現地開催ということもあり、終始温かく和やかな大会となりました。

大会の約1年前の2021年10月、大会実行委員会(スタッフ会議)を開催し、熊本大会に向けた準備に入りました。準備中には新型コロナウイルスの感染が全国的に拡大して、全ての活動が中止となりました。前回の長崎大会より3年、新型コロナウイルスの影響で、今大会が本当に開催できるのか不安でしたが、感染状

豪雨から2年が経ちました。熊本を襲ったこの大災害には、全国各地から大変多くの温かいご支援や励ましをいただきました。それを心の支えとして、熊本では着実に復興が進んでおります。しかし、まだ完全に元の姿を取り戻したとは言えません。そんな今の熊本を、より多くの方にご覧いただきたいと思いながら、準備に取り組んでまいりました。

大会では、記念法話として、藤岡教頭さん(熊本教区 球磨組 明導寺住職)より「『み教えに出遇えた喜びを行動へ』」復興支援活動から見えてきたもの、記念講演として、稲葉圭信さん(大阪大学 大学院教授)から「『宗教と利他主義』災害時にも、ともに生きる」を講題としてお話しいただきました。

その他にも記念行事として「舞踊団花童&はつ喜」と「千原太鼓保存会」による催し物が披露されました。来年度、熊本教区仏教壮年会連盟

は50周年を迎えます。現在、教区内462寺院の内、121寺院が仏教連盟に加盟いただいております。このように、加盟率は3割にも満たない状況ですが、この熊本大会を機に、教区理事をはじめ、関係各位の皆様とともに、力を合わせて加盟寺院を増やす働きかけを行っていく決意を新たにしました。



第45回宮崎教区仏教壮年大会開催報告

宮崎教区仏教壮年会連盟理事長

染川 比呂志（そめかわ ひろし）



「第45回宮崎教区仏教壮年大会」が、2023年2月19日(日)に、大会スローガン「ともに聞きまことのよろこびをつたえよう」、大会テーマ「仏教壮年会が地域活性化にかかわり、お念仏繁盛の一因になろう」を掲げ、都城市にて開催されました。この大会は毎年行われていたのですが、新型コロナウイルス感染症まん延防止のため2回延期になり、3年ぶりの開催となりました。

大会では、大分教区大野組最乗寺住職 大原瑞雲先生の記念法話の後、今大会のために制作された『活動事例集』を用いたパネルディスカッションが行われました。

この『活動事例集』は、大会実行委員会の皆様が、宮崎教区内の寺院や寺院仏主に活動事例や課題についてアンケートを実施し、その回答に基づき制作されたもので、「1. 仏教壮年大会を会員・門信徒が活動事例の情報交換や課題の共有ができる機会にしよう 2. 仏教壮年会が私にとって何のためにあるのかを一人ひとりが問い直そう 3. お寺を市民に開き活性化するために、仏教壮年会でできることを考えよう 4. お念仏のよろこびを次世代の門信徒に伝えるた



めの仏教壮年会のつとめを考えよう」の4つの方針を掲げて作られています。アンケートの回答から見えてきた傾向や課題を踏まえ、大会実行委員会の皆様「本音で語る！お寺と仏教壮年会の活性化」をテーマに座談会を行ったページが、心に響きました。新型コロナウイルス感染症拡大の中で顕在化した葬儀などの簡素化の実態や、地域におけるお寺と仏教壮年会の役割、仏教壮年会の活性化についてなど、読み応えのある内容が9ページ続き、最後に「活性化のための7つの提言」が展開されています。また、付録として「史跡巡礼 都城盆地のかくれ念仏」が掲載されています。是非一度読んでいただきたい、素晴らしい事例集です。度重なる延期のなか、都城組仏教壮年会連盟の皆様大変なご苦勞をいただいたおかげで、実りのある大会となりました。

『活動事例集』は、宮崎教区仏教壮年会連盟より、各教区教務所・沖縄県宗務事務所に1部ずつお送りしております。教務所や沖縄県宗務事務所に行かれた際には是非ご覧ください。



編集後記

北海道教区 伊藤 友一（いとう ゆういち）



新型コロナと過ごしたこの3年を振り返ると、私たち朋友は、これまでとは異なる生活を強いられてきました。なかでも、施設や病院に入っている老いた母や父に会えないのは、皆さんが一番つらく感じたことではないでしょうか。そのような中であって、人として当たり前の優しさや、エチケットが求められました。また、オンラインの利用など、新たな、そして効率的な手法も獲得しました。これまでも地震・大雨・火山の噴火等繰り返し、我々は苦難の状況を克服してきました。

しかし、これも5月には、解除されそうです。お寺の行事も回復してきています。

我々仏教は、連盟綱領にありますとおり、「自らの生き方を親鸞聖人のみ教えに聞き、ともにお念仏申す朋友の輪を拡げ、心豊かな社会の実現」を目指して活動を進めて参りましょう。

南無阿弥陀仏

「第25回全国仏教壮年大会」

岐阜教区で開催へ

2023 (令和5) 年2月11日に本年度第1回評議員会が開催され、次回、2026 (令和8) 年度に開催予定の第25回全国仏教壮年大会の開催担当教区が、岐阜教区に決定しました。

